

『オールドタウンの人々』(*Oldtown Folks*) に込められた諸問題

三 上 節 子

はじめに

『オールドタウンの人々』(*Oldtown Folks*, 1869) はハリエット・ビーチャー・ストウ (Harriet Beecher Stowe, 1811-1896) が 58 歳の時の作品で、『アンクル・トムの小屋』の次に重要な作品と言っても過言ではない。ストウの第一の執筆期は 20 代から雑誌に寄稿し始めた子ども、少女、女性向けの可愛らしい家庭道徳物語に見られる。第二の執筆期は当時の大社会問題の解決を求めて書いた反奴隷制三部作『アンクル・トムの小屋』(*Uncle Tom's Cabin; or, Life Among the Lowly*, 1852)、『ドレッド』(*Dred: A Tale of the Great Dismal Swamp*, 1856)、『牧師の求婚』(*The Minister's Wooing*, 1859) に代表される。第三の執筆期は 18 世紀中頃を舞台としたニューイングランド地方色小説群に見られる。反奴隷制の主張を加味しながら書いた『牧師の求婚』も含め、反奴隷制には触れていない『オアズ島の真珠』(*The Pearl of Orr's Island*, 1862)、多くの主張を織り込んだ『オールドタウンの人々』、そして『オールドタウン炉端物語』(*Oldtown Fireside Stories*, 1872)、『ポガナックの人々』(*Pogonuc People: Their Loves and Lives*, 1879) などがそれである。とくに『オールドタウンの人々』は、フロリダ州マンダリン村とコネティカット州ハートフォードを半年ずつ滞在しつつ、南北戦争後自由民となった黒人青少年男女のための学校教育、地域のための教会設立活動、そして南北戦争で負傷したため耳と頭に痛みを背負った次男のリハビリを兼ねた農業経営もしながら執筆した二冊にわたる長編小説で、第三執筆期の最重要作品と言えるだろう。

ストウ研究の第一人者、ジョン・D・ヘドリックはストウの作品にはいつも名説教家で伝道者であった父親に似て道徳的、宗教的、政治的メッセージがあると言う。そしてこの作品には以下に示す通り、『アンクル・トムの小屋』とリンカーンの「奴隷解放宣言」後の世界、すなわちアメリカ再建期に浮上してきた政治・宗教・文化的諸問題へのストウの警鐘としてのメッセージが込められていると言う。

Like her father, she believed that New England was the blueprint for the Nation—"the seed-bed of democracy," as she expressed it in *Oldtown Folks*—and her Florida mission depended upon founding a New England colony there.

(中略)

The resistance she experienced in writing it was overcome by the fact that she still had a political message to parlay. Ostensibly a novel of post-Revolutionary War Massachusetts, *Oldtown Folks* was directly influenced by Reconstruction politics.¹

筆者はこの研究ノートではこの作品の第3章までを取り上げ、ヘドリックの提示するストウのメッセージの特質を参考にしながらも、一行一行に込められたストウの脳裏から離れない当時のアメリカ社会に横たわる諸問題に対する彼女の認識、提案、主張といったものを読み解き、この作品の全体研究への足がかりを試みたいと思う。

1. 小説舞台の時代と地域の設定

西洋探検家たちによる北米大陸発見後に最初に来た永住移民者は宗教弾圧を逃れ、信教の自由を求めて渡ったピューリタンと呼ばれるイギリス人を中心とする者たちであった。後に会衆派(組合派、Congregational)教会を形成する1620年にプリマスに上陸しプリマス植民地を形成したピルグリム・ファーザーズと1630年にウィンスロップに導かれてマサチューセッツ湾岸に大規模な植民地を形成した人々がその先陣である。その後クエーカー教徒など信教の自由を求める他教派の人々や、共同体の運営に必要な行政官、聖職者、農民、商人、職人、学校教師、家族なども加えられた。彼らがニューイングランド植民地民としてまとまりを持ち、行政も生活も順調になってくるのは18

世紀中頃であろう。第1章でストウは1649年ニューイングランド福音伝道協会からインディアン伝道宣教師として任命され渡ってきたジョン・エリオット(John Eliot, 1604-90)の働きを称えて、彼の死から三世代を経た今を生きる人々をこの作品で描くと述べている("In my boyhood, three generations had passed since the apostle died." ²)。とすると時代設定は概算で1690年に三世代90年を加えた1780年頃となる。また、彼女はその時が「鉄道敷設以前」("the ante-railroad times," p.1)であるとも言っている。(ストウは北米先住民族を「インディアン」と呼称しすべてにおいてその語を用いているが、筆者は数回のみ用い、多くは「先住民族」とする。)

小説の舞台は、古くからインディアンの町と呼ばれる、マサチューセッツ州の架空の町、「オールドタウン」である。その町は先住民族のうち人数も力も最も強力な部族の一つがセパグ川を境として美しい草原と高地の畑をいくつも所有していた所であり、かつ、かの偉大なインディアンの使徒が最初の宣教拠点を置いたところでもあると記している。つまり移民者の三世を中心とする人々と先住民族の少数が共存している地域が想定されている。以下のとおりである。

Oldtown was originally an Indian town, and one of the most numerous and powerful of the Indian tribes had possessed the beautiful tracts of meadow and upland farms that bordered the Sepaug River. Here the great apostle of the Indians had established the first missionary enterprise among them, under the patronage of a society in England for the propagation of the Gospel in foreign parts; ³

2. 主張の1 —民主主義、博愛主義—

ストウは第1章「オールドタウンと牧師」で開口一番に「どんな人にも人間らしさというものは非常にあるもので最初はぼんやりしか見えなくてもよく観察すると個々人の人生にはそのあらゆる志向、苦闘、失敗、成功のなかにすべての他の人びとの興味をそそるものがあるものだというのが私がいつも好んで考える考え方である。p.1」と主人公の少年ホラス・ホリヨーク(Horace Holyoke)の口に言わせているが、これがストウが主張したい第一のことであろうと考えられる。つまり、一人一人の人格、人権を尊ぶことの重要性を再

確認している。ストウの生きていた後半期はそのような民主主義、博愛主義思想の実践が人間の当然の権利として強く叫ばれ、定着しつつあったのが逆もどりして、アイルランドなどから母国の経済不況を逃れて移民してきた多くの大人や子どもたちが、北部州の金権主義企業家たちから過酷な条件で働かされるなどの人権被害が起っていた。そのことをストウは過去の時代設定のなかで彼女流にチクリと糾弾しているように受けとめられる。

ヘドリックも、ストウが『チムニー・コーナー』誌(*The Chimney Corner*)で、楽観的な彼女の代弁者クリストファー・クロウフィールドに反対する論者として、南北戦争後にバラ色ではない暗い前兆が待っていると唱えるテオフィラス・ソローという人物を設定しているとして、以下のように述べている。

In it she created as a foil to the optimistic views of her spokesman, Christopher Crowfield, the darker predictions of one Theophilus Thoro. Theophilus foresees Black Codes, turbulent uprisings of the Irish, and a "headlong chase after money" in the North. He rejects Crowfield's rosy picture of a steadily democratizing South in favor of a more Hobbesian view of human nature:⁴

3. 主張の2 —キリスト教の位置の確認—

ストウは第1章の第2ページでオールドタウンを形成する美しい農村群の描写に続いて町の紹介を始める。町の建物で最初に紹介されるのが、広場の真ん中に立つ、日曜日の礼拝に馬車でやって来る人々の馬をつないでおく家畜小屋が脇に付いた、白い尖塔の「母なる集会所」("the motherly meeting-house")であった。その次に、地域学校("the district school")、中等学校("the Academy")、よろず屋、酒場が続く。ストウはよろず屋や酒場も人々が日常の雑多な事柄から政治、宗教まで歓談できる人間交流の場としてその価値を高く評価している。

さて、マサチューセッツの村に生まれた少年にとって最も尊敬でき威厳があると思われた人は牧師であったと主人公の少年は言う。というのはピルグリムたちが荒野に打ちたてた小さな神政政治の州("In the little theocracy which the Pilgrims established in the wilderness," p.3)では牧師が唯一の高貴な職業であり、教会のことから州のことまで、総督の選出から地域学校の校長の選出まで牧師の一声が大きな影響を与えていたからである。この町の牧師である、

かの総督ウィンスロップを彷彿させる姓を持つロウスロップ牧師(Parson Lothrop)は、清潔感のある最も紳士的で生まれの良い人たちの一人で、外出する時はいつでも絹のストッキング、光る膝当て、靴金具、良く磨いた靴、粉を振りかけた鬘(かつら)を身に着けていた。かといって彼は威厳を振りかざす人ではなく、キリスト教会が酒を悪と考える風習がまだない時代であったので、酒場に向いては暇つぶしをしている男たちに高尚な講義をしたり、民衆に優しく接したりした。彼の説教は上品なマディソン風な英語で、非論理性を排除した完全無欠なものであり、給料は低かったが静寂を愛し、学究肌でもあった。彼の世間的対面は、トーリー党の商人でアメリカ独立戦争時に大もうけをした船会社社長の未亡人でボストンの貴族出身の女性、Mrs. Dorothea Dixwell と結婚することによって補われた。彼女は英国国教会派の出で英国国教会信仰のままであったが、ピューリタンの中心的教派である会衆派教会の牧師と結婚した上は、夫と夫の教会の信仰に従順を示したが、夫は彼女との結婚における協定を尊重して聖金曜日、復活日、聖霊降臨日、クリスマスには彼女の出身教会であるボストンの教会("Christ Church," p. 8)に彼女の立派な馬車で出かけることを許可し、教会の了承も取りつけていた。

こうしてみるとロウスロップ夫人は贅沢で身勝手、信仰よりも見栄を大事にするという印象を受けるが実はそうでもなかった。主人公ホラスの父親(同姓同名、Horace Holyoke)が結核を患い死が間近に迫り、息子ホラスが母に頼まれて牧師を呼びに行った時、彼女はホラス少年に女性らしい同情心と優しさを示してケーキとぶどう酒を母親に持っていくよう与えた。また、悲しみの時に読むべき本として『悲しむ人への慰め』("The Mourner's Companion," p. 10)という英国国教会の祈祷書『公禱』("The Book of Common Prayer")の選集を母親への贈り物として渡した。また、牧師に、こういうときは我々の教派で用いる『公禱』の一節「病の人を訪ねるときの祈り」を用いて祈ってあげてはどうかと何度か進言した。彼はそういうものは必要ないと優しく拒んだが、ここにもロウスロップ夫人の悲嘆にくれる人々への優しさが表れていると考えられる。実はこの夫人の悲しむ者への姿勢には、英国国教会の信仰を持っていた、ストウが幼いときに死別したストウの母親と、また母を失ったストウを一年あまり育てた祖母の姿勢への生き写しの類似が認められる。

これらから、第二のストウの主張として、宗教の自由、より純粋な宗教を打ちたてるために新天地アメリカに渡ってきたピルグリム・ファーザーズや

マサチューセッツ湾岸植民地建設者たちの信仰にも、欠けがありはしないか、つまり弱者への愛の眼差しはあるのかとの問いかけがあるように感じられる。ストウはアメリカにおけるピューリタン教会の魔女裁判に言及したことはないが、そうした豊かな信仰を許容できない偏狭さや奴隷制度を教会が長く容認していた事実なども疑念として念頭にあったのではないかと考えられる。

ストウの家族は自らにそういう問いかけを実践しためずらしい家族である。ストウの父親は、アメリカ合衆国の始祖たちの精神的イデオログであったコットン・マザーの神学に立つ会衆派教会の指導的牧師であり神学者、説教者であったし、また彼女の7人の兄弟たちも同じ教派の牧師であったが、彼らも時代の変遷と共に全墮落説の神学⁵ではなく、神の愛、慰めを強調する神学⁶に変わっていく。また、ストウも最終的に母親と同じ愛と慰めを強調する英国国教会に改派する。彼女は単に個人的趣向でそのような問いかけをしたのではなく、それぞれの時代のキリスト教の評価というものは、その時代の社会と人間の幸福への貢献度で決まるわけであり、いつでもこういう問いかけが必要だというのが彼女の姿勢であったと思われる。その時代の神学への問いかけは『牧師の求婚』にも多く取り上げられている。

4. 主張の3 —アメリカ先住民族の衰退への眼差し—

先住民族への言及は第1章「オールドタウンと牧師」と第3章「私の祖母」のほか、第5章「古い教会堂」、第14章「おとぎの国での一日」、そして第2巻の最後の章、第50章最終頁にまである。第1章には2箇所に分けて彼らへの言及がある。ストウはニューイングランドの18世紀の中・後期の人々を描こうとしているので、当然、先住民族への言及を避けることはできなかったであろうし、むしろ彼女は積極的に彼らを取り上げているとすら言える。ストウは先住民族伝道の最初の宣教師ジョン・エリオットを「使徒」("the great apostle of Indians," p. 3; "the apostle Eliot," p. 21)と呼び、牧師に対する以上の敬意を表している。エリオットの宣教の足跡は多くの史料でも辿れると思うが、ここではこの作品におけるストウの解釈を披露したいと思う。

第1章でエリオットはすべての先住民族たちを彼の教えに心からひざまづかせる熱心さで、「森の子どもたち」("the sons of the forest," p.4)から敬虔なキリスト教徒たちを作り出したとある。彼は文字を持たなかった先住民族の話し言葉から書き言葉を創案し、聖書や讃美歌、綴り本の出版を行って先住民

族に文学創造への道を開いたように見えた。また彼らに農業と文明生活の技術や交易のやり方なども教えた。「しかし」、とストウはホラスの口を借りて「水源を覆う松やツガの木が切り倒され、小川の水が干上がるにつれ、この民族は彼らの原始林とともに数を減らし滅んでいく運命にあったことを彼は防ぐことができなかつたのである」と以下のように言う。

But he could not avert the doom which seems to foreordain that those races shall dry up and pass away with their native forests, as the brook dries up when the pines and hemlocks which shaded its source are torn away.⁷

さらにストウは、この使徒が亡くなって三世代が経つので、彼の二人の洗礼志願者たちが牧師館に通ずる道の両側に植えた苗木が今や壮麗な巨木になり牧師館に古風な落ち着きを与えていると言いつつ、しかし、強大な先住民族たちは白人たちの小賢しさと文明の外側で頼りない放浪生活をしながら、2、3の家族だけに縮小されたとだけ伝えている。そこには「それは悲しいことだ」などという評価の言葉をストウは加えていないが、悲哀と皮肉めいた非難が込められているという印象を受ける。

大西直樹氏は『ニューイングランドの宗教と社会』でエリオットらの宣教で改宗した先住民族のキリスト教徒たちがエリオットらの本意ではなかつたとしても、強力な武器を持つ白人たちの策略を見抜けず白人側に利用され自らの部族、さらには自らの民族全体の滅亡を招いてしまったことを指摘している。⁸そしてストウはピークオット戦争(1637年)やキング・フィリップ戦争(1675-6年)などで先住民族が白人によって人為的に滅ぼされていった歴史を知らなかつたとは考えにくいのである。

第3章では、そういうわけで窮乏を強いられた先住民族と放浪生活を好むか強いられてかの白人も混じり、人の情けにすがらざるをえない人々がこの地域には異常に多かつたことを伝えている。エリオットはその地域の人々に先住民族に対する優しさや憐れみ深さ、寛大さを教え、代々その伝統を受け継がせていたので、どの家庭も共通してある確立された権利を近くに住む先住民族に与えてきたと言う。つまり放浪するインディアンの人々は暖炉のそばの座席、おいしい食事、一杯のアップルサイダー、納屋の寝床を決して拒まれることはなかつたのだ。ホラス少年の祖父(後章で Mr. Badger と判明)は

自前のアップルサイダーを、祖母は食事ばかりでなく毛布も提供し、納屋ではなく台所の暖炉のそばに寝かせたものだ。ニューイングランドでは当時人々は家庭や学校でよく教育され、洗礼準備の勉強(カテキズム)もさせられていたので、人柄が純朴で夜に戸口に鍵をかける習慣はなく、また宿を借りに来る放浪者たちも物を盗むようなことはしなかった。彼らは泥酔や浪費よりも悪い罪を犯すことはなかった。インディアンか白人の放浪者か定かではないが、彼らは茶色の小犬を飼育し、時が経つとそれらをニューイングランドの良家に売り渡し、その犬たちは家庭の番犬としてまた日曜日には教会に同行し説教に退屈した子どもたちの無限の慰めとなって可愛いがられた。ここには数の少なくなった先住民族とその減少の原因を作った白人たちとの和やかな共存が書かれている。筆者は、ストウが「もっと以前に」共存していれば双方がもっと幸せであったろうにという白人としての自責の念から、そのような事例を思い出したのではないかと推測してみた。

また、祖母は目的もなくさまよい歩く先住民族や白人を見て、慰め励まし、時には叱責し訓話を垂れ、教育するのを喜びとしていた。彼女は悪業を働く人は話しかけてくれる人が少ないことから生ずるという信念を持っていたので、結果が見えなくても人々に話しかけることを精力的に行った。祖母の賜物はこのような共同体においてさび付くことはなく、誰か彼かが彼女からの矯正と世話を必要としていたとホラスは言う。ホラスの祖母はそういう世話を必要とする人々は自らの非でそういう境遇を招いたのだから、教育してあげなければならないと上から目線で考えていたのであろうか。それとも、アメリカに後にやって来た人々の先住民族に対する博愛精神の欠如が招いたものだと考えて、個人レベルで何とか彼らの生活の向上を助けようとしたのであろうか。ストウはそこを曖昧にしている。しかし、ストウは先住民族が力を失う境遇になった原因を奴隷制度への反論のように激しく読者や行政にぶつけてはいないが、無言のなかから彼女の真の心の声を聞くべきではないかと考える。

ロウスロップ牧師はエリオットのような宣教師ではなく、普通の地域教会の牧師として赴任していたと思われる。しかしオールドタウンはもともとインディアン宣教の拠点であったので、先住民も教会に何人かいて座席は会堂の中央部の椅子に座ることになっていた。そのことは第5章「古い教会堂」に記されている。ロウスロップ牧師はエリオット宣教師のように全墮落説 (“the

original depravity of the heart," pp.6-7) に立つて罪の悔い改めと聖霊による新生、イエス・キリストを罪から救う救い主と説くのではなく、泥酔や嘘、怠慢の悪を論じ、禁酒と勤勉を説いた。しかし彼らの生活が改まらなかった場合には、先住民族の人々を文明の進歩と共に滅びゆくことが運命づけられている人種、「森の子どもたち」なのだからという確信 ("his conviction that they were children of the forest, a race destined to extinction with the progress of civilization," p.7) を静かに表しつつ、もくもくと機械的に彼らのための任務を遂行していったと記されている。ロウスロップ牧師も文字どおり先住民族を滅びゆく人種と考えていたのだろうか。この表現のなかに、「彼らの繁栄を期待しつつも表面上は諦めを示して募る彼らへの愛情を抑えている感情」がうかがわれればしないだろうか。これらの疑問はこれからの筆者の研究課題である。

ヘドリックはこの作品のもう二人の主人公となる孤児の兄妹ハリーとティナ(Harry & Tina)とが厳しい労働を課す雇い主たちから逃れてインディアンの村にたどり着いた時、二人に食事と宿を与えた優しい母親とその母親の慈善を叱る夫に言及するが、それを博愛精神が金びか時代の功利主義につぶされる例として捉えていて、筆者のような関心、すなわちストウの先住民族に対する眼差しへの論考はない。⁹ ちなみにその記述は第5章にあるが、そのインディアンの母親はハリーの祈りを見て、「私は祈るインディアン(=インディアンのキリスト教改宗者)よ、私はイエス様をととも愛しているよ。」("Me praying Indian; me much love Jesus." p. 180)と"praying Indian"という学術上のキーワードを用いて語ったというくだりは、史実が文学に現れた貴重な資料ではないかと思われる。

5. 主張の4 —女性の結婚観の変容—

第3章「私の祖母」における叙述から、主人公ホラスの母親スージー(Susy)は祖母(後章で Mrs. Badger と判明)の末娘で、長女がロイス(Aunt Lois)、次女がケズィア(Aunt Keziah)であると推測される。姉二人の会話のなかでロイスは、スージーは美人なのだからその気になりさえすれば金持ちのショーマット大尉と結婚できたのにとスージーの打算のなさを残念がる。そして第2章「私の父」に記されているが、真面目だけれども貧しいアカデミー教師のホラスの父親と教え子であったスージーが早々結婚し、しかも彼がハーバードカレッジへの入学準備で体を酷使した結果、結核になり死を迎え、妻と2人の子

どもを引き受けることで実家に精神的・経済的負担を掛けようとしていることにも苛立ちを感じている。それに対してケズィアは、結婚は純粋な愛がなければ成立しないし、スージーとホラスには純粋な愛があったと反論する。祖母はこれが摂理("Providence")よと、摂理に従うべき、過ぎたことをあれこれ言わないで、しなければならぬことを喜んですることが大事とロイスを諭した。

ここから過去のアメリカにおいても過去の日本と同じように結婚を親や周囲の者たちが決める風習があったのだなと感じられる。その点、年を経ているが深く物事を考える祖母と、エドワード・ヤング (Edward Young, 1683-1765) の『夜の黙想』(*Night Thoughts*)、¹⁰ ロウ夫人 (Mrs. Lowe) の『黙想』(*Meditation*)¹¹ など霊的、感傷的思索の書籍 ("the immaterial and sentimental side of every question," p. 25) を読んでいたケズィアは究極的な結婚観を持っていたことがわかる。ストウはそのような打算でない究極的愛で結ばれる結婚が幸福をもたらすと考え、ストウの時代の人々もそのような結婚観を持ってほしいと願ってそのような視点をこの小説に加えたのではないかと考えられる。この結婚観が後章にどう反映していくかの研究もこれからの課題である。ヘドリックはこの作品に関してこの視点についての言及はない。

6. 主張の5 —祖母の信仰と実践—

これまでホラスの祖母については言及してきたが、ここで簡単に述べるとアルミニアン主義の信仰に立つ夫とは立場を異にし、純粋なカルヴァン主義の信仰に立ち、しかも非常に熱心な信仰者であったとある。またコットン・マザーやジョン・エリオットの言説や伝統に親しんでいた。かなりの読書家で、当時ニューイングランドのきちんとした女性ならば午前中に家事を終え、午後は読書をするという習慣を守り、¹² 歴史、伝記、神学書を鋭く味わいながら読んでいた。ニューイングランドの当時の神学の過度の厳格さを志向するあり方は魂を毒するとは考えていたが、儀式的詩的美しさや飾り物のない質朴な宗教環境は好んでいた。祖母は信仰にだけ熱心だったのではなく、義理の息子の死によって娘と孫の二人を引き取ることになるのだが、二番目の孫ホラスを自分の行けなかったハーバードカレッジに進ませたいという義理の息子の懇願をしっかりと受け止め、孫の教育を引き受けるのである。ここに、彼女の信仰の責任ある実践の姿勢が見られる。

信仰の責任ある実践の姿を義母に見たホラスの父親は、これまで神を簡単に受け入れられなかったのだが、死への準備は出来ているのかという義母の質問に、「私のような状況に立つ人間でそのことを考えない者はいないでしょう。私は熱心に考えました、神はそのことを知っていて下さいます。お母様は私が身を置くところに——私の創造主の御手のなかに——私を置くことで満足なさるに違いありません。神は間違ったことは何もなさらないお方です。p. 30」 と答えて息を引き取る。

ヘドリックは祖母の信仰の内容や特質にも言及はしていない。しかし、祖母はこの小説の中である時期まで家族や人々の中枢に立って采配を振る人物である。彼女のこれからの信仰と実践、また信仰の内容がどう展開していくのかを探ることもまたこの作品研究の重要な課題となるであろう。

7. 最後に

ヘドリックはこの作品は、アメリカ再建時代のアメリカの進むべき道を指し示す目的で書かれていると述べている。そして金びか時代に年少労働者の酷使の不当さについても指摘しつつ、多くの紙面を子どもの家庭教育、またクラウドランド・アカデミーでの自由主義、人格主義教育が理想的な教育・社会勉強の環境であることについても語っていく。ヘドリックはいみじくもこの作品を「家族や人間共同体の理想的な形を探求していく物語」("Oldtown Folks might be read as a search for the perfect form of family or human community." p. 343) として読めるのではないかと指摘しているが、ヘドリックの考える意味でも、また筆者が上記において指摘した諸観点を考究していく方向からも、広く的を得た視点だと考える。以上、僅か3章だけからの考究であったが、これらの視点を踏まえて後章の研究を続けていきたいと考える。

(付記)

- ・本文「 」内の日本文の引用と頁数は関係書のものである。
- ・本文()内の英語で " " の施されているものはすべて、関係書からの原文・原語の引用であり、頁数はその頁数である。

<註>

- 1 Joan D. Hedrick, *Harriet Beecher Stowe: A Life* (New York: Oxford University Press, 1994), p. 342.
- 2 Harriet Beecher Stowe, *Oldtown Folks*, in *The Writings of Harriet Beecher Stowe*, Vols. 15 (Boston: Houghton & Mifflins & Co., Riberside Edition, 1999), p. 4.
- 3 *Ibid.*, pp. 3-4.
- 4 Joan D. Hedrick, *op.cit.*, pp. 342-3.
- 5 カルヴァン主義神学の基本的立場で、人間の罪深さの認識と罪の悔い改めを強調する考え方、英語では通常 ”total depravity” と言う。
- 6 ヤコブス・アルミニウス(1560-1609)により提唱されたアルミニウス主義神学。救いは予め神によって定められているという予定説を否定し、救いにおける神の恩寵と人間による信仰選択の自由意志を強調した。A・リチャードソン、J・オウデン編『キリスト教神学事典』教文館、1995年、34-35頁参照。
- 7 Harriet Beecher Stowe, *op.cit.*, p. 4.
- 8 大西直樹『ニューイングランドの宗教と社会』彩流社、1997年、49-56頁参照。
- 9 Joan D. Hedrick, *op.cit.*, p. 343.
- 10 イギリスの詩人で戯曲家、この長詩(1742-6)の正式名は、*The Complaint, or Night Thoughts on Life, Death and Immortality* で当時大変な人気だった。*The Cambridge Guide to Literature in English*, p. 1051.
- 11 イギリスの戯曲家、詩人、編集者の Nicholas Rowe (1674-17189) の夫人か。*Ibid.*, p. 816.
- 12 Harriet Beecher Stowe, *The Minister's Wooing*, in *The Writings of Harriet Beecher Stowe*, Vols. 5, p. 41.

ストウは『牧師の求婚』において当時のニューイングランドのきちんとした女性は「たしなみ」(“faculty,” p.41)としてそのような時間の使い方を習慣としていたと述べる。ストウは本作品では祖母の Mrs. Bandger にその理想を体現させている。

<参考文献>

第一次資料

1. Stowe, Harriet Beecher. *Oldtown Folks*, in *The Writings of Harriet Beecher Stowe*, Vol. 15. Boston: Houghton & Mifflins & Co., Riberside Edition, 1999.
2. Stowe, Harriet Beecher. *The Minister's Wooing*, in *The Writings of Harriet Beecher Stowe*, Vol. 5. Boston: Houghton & Mifflins & Co., Riberside Edition, 1999.
3. Stowe, Charles Edward. *The life of Harriet Beecher Stowe, Compiled from Her Letters and Journals*. London: Sampton Low, Marston, Searle & Rivington Limited, 1889.
4. Stowe, Charles Edward & Stowe, Lyman Beecher. *Harriet Beecher Stowe*, London: James Nisbet & Co., Limited, 1911.

第二次資料

1. Hedrick, Joan D. *Harriet Beecher Stowe: A Life*. New York: Oxford University Press, 1994.
2. Ousby, Ian, ed. *The Cambridge Guide to Literature in English*. New York: Cambridge University Press, 1993.
3. A・リチャードソン、J・オウデン編『キリスト教神学事典』教文館、1995年。
4. 大西直樹『ニューイングランドの宗教と社会』彩流社、1997年。